

地域住民の障害児・者の受け入れと地域づくりに関する研究

大川眞智子 岩村龍子 平山朝子 杉野緑 松下光子 大井靖子 梅津美香 古川直美 (大学)
安藤邦章 森島千里 吉田元気 熊崎千晶 (羽島学園) 横山郁代 (羽島市保健センター)

I はじめに

知的障害者更生施設羽島学園は、平成元年の現在地移転以来、地域住民に学園のことを理解して受け入れてもらうために、地域交流新聞「あぜみち」の学園生と職員による手配り、ボランティアの受け入れなど、住民との交流を図ることに努めてきている。

本研究の目的は、地域住民の障害児・者に対する受け入れの素地を明らかにして、受け入れを促すための改善策を検討することだが、今年度は、共同研究の初年度にあたるため、まずは、学園の概要や学園が実施してきた取り組みや学園における看護活動の内容、活動上の課題等を職員から聴取したので報告する。

II 羽島学園の概要

- 1 目的：知的障害者福祉法に基づき、18歳以上の知的障害者の方が健全な社会生活ができるように、必要な生活や作業の支援と訓練を行い、社会自立を促し、障害者福祉の向上を図る。
- 2 基本方針：一人ひとりの発達段階にあった作業指導と生活支援、年を重ねても豊かに楽しく生きる生活への支援、グループホームなど地域生活のための支援と援助、以上3点である。
- 3 設立：昭和43年（平成元年に現在地移転）
- 4 定員：入所80名、通所28名、通所だけはな

分場15名、短期入所利用5名

5 職員構成：施設長、支援員(29名)、看護師・栄養士(各1名)、事務員(3名)、調理員(4名)、嘱託医(1名)

6 関連施設：知的障害者授産施設 双樹園、生活サポートはしま(居宅介護事業、地域療育等事業、知的障害者生活支援事業にかかわる)、グループホーム4ヶ所である。これら全ての施設が羽島市内に設置されており、羽島市内外の知的障害者(在宅を含む)の生活を支援している。

III 入所者の状況

年齢構成(n=80)は、20歳未満3.7%、20歳代16.2%、30歳代18.8%、40歳代23.8%、50歳代21.3%、60歳代16.2%であり、40歳以上が約6割を占めている。また、入所年数(n=80)は、5年未満13.7%、5~10年17.5%、11~19年25.0%、20年以上43.8%である。入所者の高齢化や入所期間の長期化がうかがわれる。

IV 地域住民との交流を図る取り組み

1 地域住民との交流を図る取り組みの内容

住民との交流を図る取り組みの中でも、地域交流新聞「あぜみち」の配布とボランティア受け入れに関する活動の目的・実績や住民への働きかけと意図、住民の反応、成果、今後の課題等は、表1に示したとおりである。

表1 地域住民との交流を図り、学園に対する住民の受け入れを促すための取り組み

活動名	活動開始年	活動頻度	活動経緯	活動目的	活動内容	住民への働きかけと意図	住民の反応	成果	問題・課題
あぜみち(地域交流新聞)	平成2年~	毎月1回発行	・移転前までは、地域住民とのかかわりに重点を置いていなかった。また、学園内だけの生活や人間関係では、学園生に刺激がないので、移転後は住民とのつながりをもてるような活動をした、何かやろうということになった。	・新聞を通して住民との交流を図る ・学園生と住民のつながりを保つ	学園の行事等を掲載した新聞を近隣地区住民、市内の学校・市役所へ配布	・開始当初、I地区のみに職員が手配りした。地図に住民の反応を書き込んでいった。S町のI地区以外の地区に対しては、区長へ回覧版と一緒に配布してもらうよう依頼した。 ・平成10年~、地域住民に学園生を知ってもらうためには直接学園生と会ってもらったほうが良いと考え、I地区及び市内の小・中・高校へ、職員と学園生と一緒に手配りした。 ・平成15年~、はしまふるさと福祉村のスタートに伴い、N小学校区内の全戸に配布	・住民は学園のことを知らなかった。学園のことを話しながら手配りした。 ・手配りするうちに、世間話をしたり、雑談やピンポンでお茶を振舞われるようになった。一方、手配り自体、拒否されることもあった。 ・字が小さい、読んでいない、話して伝えて欲しいという意見が聞かれた。	・学園生が民家で冷蔵庫を開けて勝手に食べるものがあつたが、住民と職員が顔見知りになっていたので大層にならなかった。 ・畑で取れた野菜や果物を取りに来るよう言われ、わけでもらうことがある。 ・住民が、以前は学園へ行きたいと思っていたことなど本音を聞けるようになった。 ・住民との人間関係・信頼関係作りにつながった。	・今後、学園が地域貢献できる施設に変わらなければならない。 ・地域の世話好き、面倒見の良い人を地図にプロットして、助け合いマップを作りたい。 ・自立生活支援センターは、設置で終わりではない。互いが点の存在で終わらないように、センターは、助け合いの網の目作りの拠点にならないといけない。
ボランティアの受け入れ	平成元年~	随時	・当初、ボランティア募集したが、集まらなかった。社協研修でボランティア体験があり関心のある人に誘って来てもらうようになった。	・住民への啓発活動として、学園を理解してもらう ・地域に貢献する	・外出付き添い：映画館・買い物や喫茶店など、園生の希望する場所へ一緒に行く。 ・旅行付き添い：園生と旅行する。ボランティアは、園生が希望する人もある。聖徳学園大学の学生など。 ・お花：H市内の住民。お花サークルの形態で、ボランティア個人個人の楽しみとして来てもらう。 ・抹茶クラブ：H市内の住民。お抹茶を楽しむ。先生として2人来ています。お菓子が出るので、園生に好評。	・園生とボランティアの相性を考慮するために、一緒に作業をしてもらう。 ・大学生、実習等で施設に来た際に、ボランティアを勧めている。趣味・特技を生かしてもらおうが、学生の負担にならないよう心がけている。 ・福祉協力校として、高校の教員連合会で教員に作業参加してもらい、その体験を園生に伝えてもらったことで、高校生のボランティア参加につながった。	・I地区の人は忙しいと言いが、今までボランティアのかけがえがなかった。ボランティアの口コミで参加者が増えた。	・外出付き添い：ボランティアのOOさんと一緒にということで、園生が外出するようになった。園生が穏やかになった。職員はどうしても口出しするので職員と違うのが良い。 ・お菓子・夕食作り：以前は、一緒に作ったり食べていなかった。ボランティアが作ったものを園生が食べるだけだったが、一緒にすることで、園生がボランティアに御礼を言うようになった。少人数で対面して、何かを一緒にやることは、お互いにとって良い。	・中・高校生を活用したい。 ・幸福り大会を行なうが、地元を巻き込みたい。仕掛かけで、地区の人もある。N中の生徒会を誘いたい。

また、地域交流新聞「あぜみち」の第1号から現在に至るまでの記事の中から、地域住民と学園生の交流を図る取り組みを取り出した結果、以下の内容を確認した。

1) 地域の文化・運動行事への参加

S町民運動会、S町民文化祭、芋掘り、どんどや、なまずみこしコンクール、ふれあい芸能大会、もちつき大会等に、招待されたり、一住民として参加している。また、地区の祭りで、子ども神輿が学園に立ち寄り、神輿を披露している。

2) 地区との共催による夏祭りの実施

平成元年当初、羽島学園祭を開催し、学園関係者のみが参加する行事だったが、学園生から「自分たちだけでは寂しい」の声があり、平成3年にボランティアや出店者を「あぜみち」で募り、学園以外の人参加して学園祭を実施した。平成4年に地区の共催申し出を受け、夏祭りとして、以後毎年実施している。

3) 保育園、小・中学校や高校との交流

学園で運動や趣味活動等を通じての交流会を実施したことをきっかけに、学園生が運動会・合唱大会・文化祭への招待を受けたため、学園生が現地へ出向いて交流することにもつながった。学校側は、福祉教育の一環として、位置づけている場合もある。なお、以前に交流した小学生が大学生になり、ボランティアとして学園生とかかわることも出てきている。

4) 高齢者との交流

学園生が隣接する施設へ出向いて、施設内の見学・掃除等を通して高齢者と交流した。

5) 地域へのボランティア活動

学園生がボランティアとして出向き、近隣の駅周辺や堤防の空き缶・ゴミ拾いを行なった。

2 地域交流新聞「あぜみち」の掲載内容

1) 学園の活動PRや目的・内容の説明

特に、移転直後の新聞には、学園の活動内容(作業、年間行事等)や意図を住民に理解してもらうための記事が見受けられる。また、新設グループホームの紹介もあり、近隣住民の理解や声かけが入居者を支えていることが述べられている。

2) 地域との交流内容や交流した学園生・住民の感想

具体的にどのような形で地域住民と交流したのか、交流に至る経緯(例:Oさんから誘われた、招待された等)、交流時の学園生や住民の様子、交流した学園生や住民がどのように受けとめたのか等が記載されている。また、交流した小・中学生が、学園生と交流することで改めて気づいた

自分の障害者観や、交流を通して変化した障害者に対する自分の気持ち・考えを素直に綴った感想文も掲載されていた。

3) 交流による学園生の変化

交流内容(例:カラオケ、踊り、民謡)に対する関心・意欲の高まり(例:「もっと住民と一緒に楽しみたい。教えてもらいたい。」)が表出されたことや学園では見られない自然な会話や表情が住民との間で見受けられたことが記載されていた。

4) 学園外で住民の協力が必要な場面の事例紹介

駅等の学園外で困っている様子の学園生に対しては、住民から声かけをして欲しいことや日頃から挨拶をして自然に声をかけてほしい旨を伝えていた。

5) 交流した・お世話になった住民への謝意

様々な場面でお世話になった、あるいは交流した住民に対しての謝意が常に表現されていた。

6) 学園生の日常生活の様子や園生の気持ちの紹介

作業内容だけでなく、食堂での食事内容、部屋替え、旅行やクラブ活動等の普段の生活の様子やそれに伴う学園生の気持ちが紹介されていた。

7) 学園生が生活上の課題を主体的に問題解決する様子の紹介

学園で共同生活をするにあたって直面する課題について、学園生が話し合いを通して主体的に解決していく様子が紹介されていた。

8) 学園生に対する保護者や職員の思い

学園生が成人を迎えるにあたっての保護者の気持ちが保護者自身の言葉で綴られていた。また、「あぜみち」を学園生と手配りすることに込められた職員の意図・思い等が記載されていた。

V 羽島学園における看護活動

学園の看護職は1名であり、入所者80名、通所者25名の健康管理について責任をもつ。入所者は、40歳以上が過半数を占める。糖尿病・高血圧で服薬治療中の者は数名いるが、重度の要介護者や吸引等の医療処置を要する者はいない。

1 日常の看護活動

1) 受診付き添い

平日の午前中は、医療機関への受診付き添いが主である。総合病院を受診する際は、スムーズにすすむように隣り合わせた科で受診できるよう組み合わせる。診察時は、なるべく学園生本人が医師に症状などを話せるようにしている。看護師としての判断を求められれば、本人が話した後に自分の判断を医師に伝えている。なお、学園生が

受診自体を嫌がる場合は、事前に医師へ伝えている。また、医療機関に対しては、常に謝意を示し、よい関係性、つながりを保つよう心がけている。

2) 健康相談

作業中に学園生が医務室へ来て体調不良を訴えに来た場合、学園生の訴えを十分に聞く。本人の訴えだけで判断できないことが多いので、担当職員に本人の様子や状況、担当職員の判断を聞きに行き、確認している。

3) 基本健診・歯科検診等の企画・準備・調整

嘱託医や羽島市などと日程や方法について相談し、スムーズに受診できるよう調整を図っている。例えば、住民検診(胸部レントゲン検査)は、羽島市の実施日程にあわせているが、一般住民に比べて長時間かかるので、羽島市保健センターに相談して、時間を長めに設定してもらえよう働きかけている。

4) 感染症予防のための働きかけ

施設内感染症(O157、MRSA、インフルエンザ、結核等)予防の手引きを作成し、感染しない、広めない、持ち込まない、持ち出さないために、流行前などの適切な時期に職員間で手引きの内容を読み直し、情報の共有により予防に努めている。学園生に対しては、特に冬場は、インフルエンザを予防するために、インフルエンザワクチン接種の企画・実施、手洗い・うがいの励行、帰省先から戻ってくる週明けの健康チェックによる早目の発見・対応に努めている。

5) その他：健康観察、薬の管理等である。

2 看護職として大切にしていること

1) 否定せずに学園生の思いを聞く。

2) 学園生に対して、健康状態やそれにまつわる思いを早めにいろいろな角度から尋ねて、看護職として判断するための素材を引き出す。

3) 自分から訴えられず、見た目では判断できない場合があるので、早めに受診して、事実としての検査結果を重視している。

4) 早めの対応、予防的にかかわることが重要である。

3 健康づくり活動

体脂肪率の高い者(30代、5名)を対象に、平日に1時間程度のストレッチやウォーキングを実施しているが、週末に帰宅した際のお菓子の摂取等があるため体重減少につながりにくい。なお、朝礼後は、全員でストレッチをしており、各部屋でビデオを見ながらの練習も行なっている。

4 看護活動上の今後の課題

平日の午前中は受診付き添いがあるため、医務

室にいることが難しいが、学園生に声をかけて、一人ひとりの思い・悩みをじっくり聞く機会や時間を増やすことである。

VI 看護職が捉えている地域住民との交流が学園生に与えている影響

医療機関を受診した際に、一緒に待っている一般の人とトラブル無く過ごすことができている。隣り合った人に、天候のこと、受診理由等を素直に話しかけている。話しかけられた人は、学園生だとわかっていると思われるが、気軽に世間話に応えてくれている。

学園生は、「学園外へ行きたい」という思いが強いので、他者と交流する場へ出向くことは、生活する上で必要なことであるし、生活の場が広がってよい。

今まで地域に対して閉鎖的ではなかったのに、住民と関係性をつくるための社会性が身についたのかもしれない。施設外の人や仲間以外と話すことに慣れている。

VII 地域住民との交流にあたって、看護職が住民や学園生に働きかけていること

ちょっと声かけをして、住民と学園生が話すきっかけづくりをしている。学園生には、場面に応じた適切な話し方を教えることもある。

特に、地区と共催の夏祭りでは、住民ボランティアとの関係づくりを行い、つながりを深めるように心がけている。

VIII 「共同研究報告と討論の会」の討議を終えて

住民との交流を図る取り組みは、学園生が地域の一住民として生活するための関係性を育むプロセスであり、学園生の生活の質を高めていると考えられる。特に「あぜみち」は、交流することは互いにとって意味があることを地道に伝えつづけてきたものであり、「あぜみち」の手配りによって、職員と近隣住民との一対一の信頼関係が築かれてきたと思われる。今後は、住民にとっての交流の意味や住民の思いを明らかにすることが必要であると思われる。そこで、報告会では、住民の受け入れ素地を、今後どのように明らかにするか、意見交換をしたいと考えて、討議を設定した。具体的な方策を検討するまでには至らなかったが、以下のとおり多くの示唆を得ることができた。

討議には、共同研究のメンバーである羽島学園や羽島市保健センターの看護職及び本学関係者以外に、病院看護師や町役場保健センターの保健師らが参加した。討論の中では、在宅障害児の母親を対象にした調査研究を行なった参加者から、

行政がどのように障害児者への施策を位置づけているか、認識しているのが重要ではないかという、意見が出された。また、施設入所前までは、障害児者本人や家族を地域で支援していても、施設入所後はつながりが途絶えてしまい、施設入所後の本人・家族の状況が把握しがたく、それは出身地から離れた施設であれば尚更であるという、地域と施設の連携上の課題が出された。一方、学園生は出身地に対する思いが強いことから、学園生と実家のある地域を結び付けていくかかわりが必要ではないか等の意見も出された。

また、羽島学園の地域住民との交流を図る取り組みの中でも、学園生と職員による「あぜみち」の手配りが、住民の学園を受け入れる気持ちにどのような影響を与えたのか、それはなぜなのかについて参加者から問われた。手配りは、住民が学園生と挨拶や会話をする等、個人的にふれあう機会になっていることから、住民にとっては、その機会を通して学園生がどのような人なのかを理解し、それまでの知的障害者観やイメージが徐々に変化していったのではないかという意見や近隣者としての人間関係・信頼関係づくりや近所づきあい感覚が大事であるという意見が出された。

以上の様々な意見や質問が出される中、今回の研究では、住民が羽島学園を受容していくプロセスにおける気持ちの変化、関係性や行動の変化等を明らかにしていないことが明白になった。今後は、近隣住民の羽島学園に対する気持ちや考えを丁寧に聞いていく必要があることを再認識した。また、「あぜみち」の手配りは、学園生の「学園外へ行きたい思い」を充たしていたと思われ、手配り以外の住民との交流も、学園生の意欲を高めることや、生活をより豊かにすることにつながっていたと思われるが、それらについて学園生が具体的にどう受けとめているのか、どのような思いなのかを明らかにする必要があると思われた。今後、学園生と住民、双方にとっての交流の意味、交流に対する思い、受けとめ方を明らかにしていくことは重要と考える。

行事として企画された交流以外にも、受診先の医療機関、市民プールや喫茶店で出会った住民との何気ない挨拶、世間話などの自然なおつきあいを通して、学園生と地域住民の関係性は着実に育まれていると思われる。今後、障害児者が地域の中でいきいきと暮らしていける地域づくりを検討していく上では、普通な近所づきあいができるような住民との一対一のかかわりこそが重要なので、学園生と住民との普段着の交流にも着目し

ていきたい。

今後は、前述したことに加えて、障害児者が地域を受け入れられるとは、そもそも一体どういうことなのかを追究し、障害児者と家族がいきいきと暮らしていけるための地域づくりの戦略として、何をすべきかを具体的に検討していきたい。